

# 欧米茶書の中の東洋

## ——ニコラ・ド・ブレニー『茶論』(1687)——

滝口 明子 (大東文化大学国際関係学部)

### East meets West in Early Books on Tea: Nicolas de Blégny, *Le bon usage du thé, du café et du chocolat* (1687)

Akiko TAKIGUCHI

#### 目次

はじめに

「ニコラ・ド・ブレニーの茶論—17世紀後半のフランスにおける茶の医学的意味について—」

- 1) ブレニーの生涯と著作について
- 2) 茶論の内容
- 3) ブレニーの茶論の位置：同時代の医療と茶の医学史の中で

おわりに

注

#### はじめに

ヨーロッパにおける初期の茶書の中で最も重要な文献の一つとしてニコラ・ド・ブレニー (Nicolas de Blégny, 1646?-1722) の「茶論」(1687) がある。

本稿は、2003年3月に公刊された拙論に若干の修正を施し、再刊するものである。原題は「ニコラ・ド・ブレニーの茶論—17世紀後半のフランスにおける茶の医学的意味について—」、掲載誌は『科学医学資料研究』第31巻3号2003年3月15日(ページ: 311 (37)-319 (45))であった。残念ながら、この学術雑誌は本号(通巻343号)が最終号で、発行所「野間科学医学研究資料館」の解散とともに終刊となった。そのため現在では入手が非常に困難になっている。また、ブレニーの茶書については、その後も欧米、日本を問わず未だ本格的な研究は見られない。そこで、今後の茶の

学術的研究の基礎資料として再録し、一般に公開提供したいと考えた。

\*\*\*

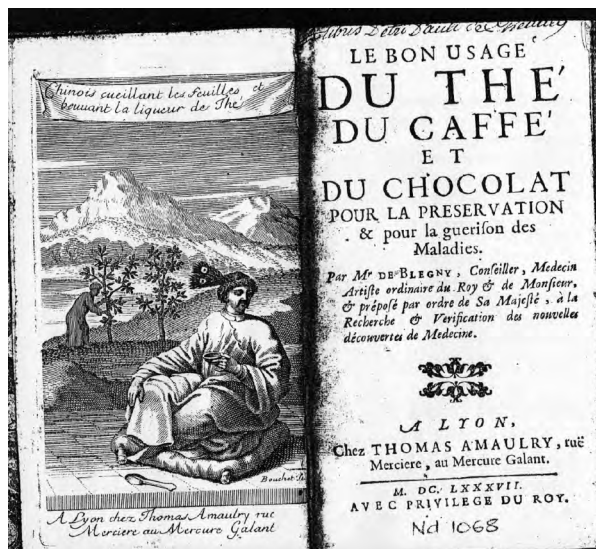


図1 プレニー『茶、コーヒー、ココアの正しい用法』（1687）

ニコラ・ド・ブレニーの『茶、コーヒー、ココアの正しい用法』（1687）<sup>(1)</sup>は、近代ヨーロッパの食卓にほぼ同時期に登場した三つの新しい飲み物を論じた本で、飲み物の文化史では必ず参照される重要な文献である。著者ブレニーは宮廷の侍医でもあったので、三つの飲み物について医学的見地から考察を加えており、薬としての作用についても論じている。したがって本書は当時の医学的常識や身体観を知る上でも非常に興味深い文献となっている。しかし、その内容についてはまだ断片的な紹介しかなく、医学史上の位置づけも十分になされているとはいえない。そこで本稿では本書の茶論部分について検討し、17世紀後半のフランスにおける茶の医学的意味について考える端緒としたい。

## 1) プレニーの生涯と著作について

ブレニーは1646年ころフランス北東部のショーモン・アン・バシニィに生まれ、1722年に南仏プロヴァンス地方のアヴィニオンで亡くなった。父親は薬剤師で、ニコラは外科医学校の管理人をしていた兄を頼ってパリに出て、その学校で学び、外科医となった。薬剤師助手を経て、1674年には薬剤師にもなり、サン・コムで貧しい人たちのための教区外科医の仕事をしている。そのうちヘルニア治療のバンドを作る工場を創始したり、ヘルニアの治療法についての本を出版したりしながらしだいに頭角をあらわした。ブレニーは、1678年に王の外科医の地位を手に入れ、1685年には

王弟の侍医となっている。宮廷の侍医だったダカン (Antoine d'Aquin, 1620?-1696) やファルコネ (André Falconet, 1611-1691) といった人たちの庇護を受けたとされている。

当時のフランスは太陽王と呼ばれたルイ 14 世の時代 (Louis XIV, 1638-1715: 1643 年即位、親政は 1661 年から 1715 年) で、政治的には王を中心とする中央集権体制強化の時期とされている。またこの時代の建築、造園、藝術の最高峰を集約したともいえるヴェルサイユ宮殿の造営はルイ 14 世親政開始の頃から始められ、1672 年から 1682 年にかけて宮廷と政府機関の移転がおこなわれた。ブレニーが宮廷の侍医となったのもこのころで、本書にも宮廷での治療や、効果をあげた治療法のことなどが書かれている。

この時期から 1690 年代初めにかけて、ブレニーは科学講演や講義などをおこなう教育の場を開設したり、貧しい人々のための治療所を開いたり、病院と化学実験室をつくったり、八面六臂の活躍をしている。

著述、出版活動もほぼ同じ時期に開始しており、例えば次のような本を出している。

1676 年 『ヘルニア治療について』

1674 年 『性病の治療について』

1682 年 『イギリスの薬について』

1687 年 『病気の予防と治療のための茶、コーヒー、ココアの正しい用法について』

1688 年 『美容と健康の秘訣』

ブレニーはこのように多くの著作を残しているが、そのタイトルからわかるのは、実際の治療法に関心が深く、薬や化粧品、医療器具などの製造や考案に熱心な人物だったということである。その特徴は次の第 2 章で紹介する「茶論」のなかにもはっきり表れている。医学史の流れのなかでは、時代をリードした偉大な学者の著作の方が注目されやすいが、このような臨床医の著作にも視野を広げると、その時代に一般的だった身体観や治療理論の本質がつかみやすくなるのではないかと考える。

さて、ブレニーの出版活動の中でもう一つ重要なのは、フランスではじめての医学雑誌を編集、刊行しようとしたことだろう。ヨーロッパの定期刊行物の歴史からすると、17 世紀は重要な出発点とされている。1605 年にアントワープでヨーロッパ初の新聞が創刊され、同年フランス初の新聞「メルキュール・ド・フランス」も刊行され始めた。初期の定期刊行物発行は当局の検閲や資金面でさまざまな困難を伴う仕事だった。ブレニーの場合は、起業家としての才覚があり、資本の蓄えも少しできたので医学雑誌の刊行に取り組んだのかもしれない。ブレニーの出した雑誌のタイトルは次のようになっている。

1679 年 『医学の全領域における新発見』

*Les nouvelles découvertes sur toutes les parties de la médecine*

1680 年 『アスクレピオス (医神) の神殿』 *Le temple d'Esculape*

1681年『医学新発見雑誌』 *Le journal des nouvelles découvertes*

1684年『(医) 学術雑誌 メルキュール サヴァン』 *Le Mercure Sçavant*

ブレニーの医学雑誌はいずれも長続きしなかったが、最新の医学情報を定期刊行物によって伝えようという発想は先駆的で貴重なものだった。ブレニーは雑誌のラテン語訳をジュネーブで出すなど、フランスだけでなくヨーロッパ規模の医学の情報交換を目指していた。また当時厳しかった出版統制のもとで1682年3月21日に発禁処分を受けてからは、パリからアムステルダムへ拠点を移して雑誌の発行を続けようと努力している。このようなことから医学雑誌発行にかけるブレニーの意欲は並々ならぬものだったことがわかる。

ブレニーの生涯についてはまだ謎の部分が多い。王の侍医団の中でブレニーの庇護者だったダカンがファゴン (Guy-Crescent Fagon, 1638-1718) と対立して失脚したのは1693年のことである。このとき以降ブレニーの後半生は波乱に満ちたものになった。パリを離れ、ロワール地方のアンジェでは何度か獄中に起居したとされている。1699年3月26日アンジェを去り、イタリアを旅行してナポリに滞在した。帰国後、南仏アヴィニョンに居を定め、1722年、76歳のころ生涯を終えた。

限られた資料だけから断定することは避けなければならない。しかし少なくともニコラ・ド・ブレニーは、常に新しい薬(茶、コーヒー、ココアもその原料となった)や医療器具の開発に意欲的に取り組む創意工夫の人であったこと、パリではなく地方で生まれ、薬剤師の父を通じて薬草や民間医療の知識も継承していたこと、出版をとおして医学情報や知識を社会的に広く普及させようという意図をもっていた人物だったことなどは記憶されてよいだろう。

## 2) 茶論の内容

ブレニーの茶論は全6章で、各章の標題は次のようになっている。

第1章 茶の形状、栽培地、異名について

第2章 茶の選び方と価格について

第3章 茶の特質について

第4章 茶のさまざまな飲み方について

第5章 茶の特別な効能について

第6章 茶の解熱シロップについて

第1章は「東インドからもたらされる小さな乾燥した葉およびこの葉から作り、砂糖を加えるとかなり美味しい飲み物になる液体を、ここではテ (Thé) と呼ぶことにする」という一文から始まる。まず茶(テ)の定義から始めているのは、ブレニーの学問的態度を表わしているだけでなく、その必要があったからにはほかならない。東アジアの茶は1610年頃からオランダによってヨーロッパ



図2 ティーポット (Blégné, 34)

に輸入され始めていたが、この茶論が出た 1687 年当時、ヨーロッパでは茶がどんな植物なのかまだはっきりわかっていなかった。例えば、シモン・パウリ (Simon Paulli, 1603-1680) のように、ヨーロッパにも茶と同じ植物があると主張する論者も少なくなかったので、プレニーはわざわざ「東インドから」と断っている。プレニーは、「ヨーロッパ産の茶」の議論に深入りすることは避けて、むしろ日本産と中国産の茶の差異に注目する立場をとっており、日本産の茶の方が葉は小さくて味はずっと良いと評価している。

第 2 章では上質茶から粗悪茶まで、さまざまな種類の茶について、葉や浸出液の色、味、香りおよびその価格についての記述がある。例えば、良い茶は「明るく緑がかかった黄色で、スマレか竜涎香が混じっているのかと思うようなとてもよい香りで、苦味や渋味はそれほど強くない」という。一方、粗悪茶はとても苦くて渋く、多量の砂糖を入れてもまずかったらしい。

この第 2 章と第 4 章には茶の種類や飲み方について詳しい解説があるので、当時飲まれていた茶について考える上で非常に興味深い資料となっている。ただ本稿はプレニーの茶論の医学史的意味について考えることを主なねらいとするので、茶の医薬的作用に関する議論を含む第 3 章と第 5 章を中心に検討することにした。

第 3 章でプレニーは茶の最も重要な「特質」として二つの性質を挙げている。すなわち、苦味 *amertume* と渋味 *astriction* である。

茶を飲むとき最も強く感じられる性質は、苦味と渋味である。そこで苦い薬ということについて私のはかつての著書で、イギリスの薬について書いたことに触れておきたい。<sup>(2)</sup>



イギリスの薬とは、キニーネのことである。キニーネは、間歇性の発熱に効く薬として当時注目されており、ブレニーは前述のとおり1682年に『イギリスの薬』と題してキニーネについての本を出版している。以下ブレニーの原文にできるだけ忠実に、「苦味」をはじめとする茶の特質についての記述をまとめて示すことにする。

混合物 *les corps mixtes* を構成する要素には、酸、水、火、エーテル体、土 *les corpuscules acides, liquids, ignées, étherés & terrestres* がある。

このなかで酸だけが舌を突き刺すような味がある。全ての苦味は舌を刺す。苦味の働きは舌で鋭く感じるものである。ゆえに、全ての苦味ある混合物は、その成分に酸が含まれている。

さて、たくさんの水に酸を混ぜると、舌を刺激し、ものを溶かす作用のある液体を生じる。この例としては、塩酸 *les esprits de sel*、硫酸 *les esprits de vitriol*、明礬 *les esprits d'alun* などがある。

もし酸が火と結合すると、腐蝕性のもの、例えば、昇汞、硝石、腐蝕用器具にする石などを生じる。

もし酸がエーテル体である硫化物や油性物と強く結合すると、はちみつや砂糖のようなどても甘い混合物を生じる。

それゆえ、酸とちょうどよい割合で混ぜ合わせ化合させて苦い味を生み出すことができるのは、土の粒子 *les corpuscules terrestres* だけということになる。そして実際、塩 *sel* の中により多くの土 *terre* があればあるほど苦味が強くなり、精製のされ方が少ないほど、塩は苦くなる。

さて私が名前を挙げた元素のうち、酸はもっとも重く、それゆえ最も冷である。そして土は酸よりも軽く、水と同じで、火とエーテルよりは重いので、土はほどほど、すなわち両極端の中間の性質である。

このような土と酸が、酸の優位な割合で一緒になると、その混合物は清涼剤 *rafraichissant* あるいは、少なくとも私たちの体温を適度に保つのに非常にふさわしいものとなるはずである。

さて、茶は乾燥していることから、茶の構成要素の中に、エーテル体はほとんどなく、水はそれよりさらに少ないことがわかる。香りに関しては、茶は乾燥しているので揮発性でスピリット性 (*spiritueuse, esprits* の豊富という意味にとっておく) のある火の成分をもつことがわかる。ただし茶の香りは柔らかで繊細なほのかなもので、火の成分はあまり多量ではないと考えられる。

これらのことを前提とすると、茶の特質とそれに基づく茶のさまざまな性質を説明するのはきわめて容易なこととなるだろう。なぜなら、まず、茶には酸を非常に多く含む部分があり、酸の本性は血液やミルクなど栄養豊富な液体を凝固させることである。また茶にはアルカリあるいは土の成分が含まれており、これは固体部分 *les parties solides* を縮める働きをする水分や油分を吸収するので、固体部分を引き締めて強固にするのに役立つ。それゆえ必然的に、この

葉は非常に収斂性があるといえる。そしてさらに、茶は揮発性とスピリット性のある火の成分を持っていて、その火の成分は茶の香りからはっきりそれとわかるほど多量なので、茶が氣 les esprits の乱れを直し、元気を回復させる働きをもつのは至極当然のことである。以上のような解説から茶の本性と諸性質に関して適切かつ全般的な考え方をつかんでいただくことができるだろう。<sup>(3)</sup>

このあとプレニーは、茶の諸特性については5章で詳説する、としてこの第3章を閉じている。さて第5章冒頭でプレニーは、「茶の効用の中で最も著しく、最も広く知られているのは、普通ならきつと疲労困憊してしまうほどの(長時間の)覚醒状態にも耐えられるようにさせる作用である」と述べている。つまり、茶の最大の特性は覚醒作用であるとして、睡眠と覚醒の仕組みについて述べることから始めている。

覚醒 la veille とは、プレニーによれば「身体が意思に基づいてあらゆる機能を発揮できる状態」であり、それを支えているのは、「魂氣」les esprits animaux<sup>(4)</sup>の絶え間ない流れである。

覚醒状態は、全ての神経 les nerfs の中を魂氣が絶えず流れており、その結果感覚器官を構成する神経にも魂氣が絶えず流れていることによるのみ維持されている。それゆえ、この魂氣が消散したり、魂氣の通路に何らかの妨げが生じた場合、睡眠 le sommeil の原因となる。睡眠状態とは、感覚が魂に知覚を伝えられないほど外部感覚が低下していて、その他の身体部分は全て弱まり、弛緩し、本来可能なはずのあらゆる意思的行動ができなくなっている状態と定義できる。<sup>(5)</sup>

このことから、なぜ人は重労働や長時間の覚醒状態のあと自然に眠り込んでしまうのかわかる、とプレニーは言う。

なぜなら、重労働や長時間の覚醒は多量の気を消散させるため、とうとう最後には気は非常に稀少になって、全ての神経を満たして身体を支え、感覚や動作に適応させることができなくなってしまうからである。その結果、新たな循環によって浄化され俊敏(subtile 動きやすく、浸透しやすい感じ)になった血液が、消散したのと同量の気を脳に送り届けてくれるまで、身体は不動無感覚の状態にとどまらざるを得ない。なぜなら、気の消散によって不可避免的に悪氣 des vapeurs が生じるが、この悪氣は脳に昇り、気を乱し、諸神経の入口に一種の障害物を形成するものなので、身体の末端がだるく弱く不活発な状態に陥ったとしても驚くにはあたらなない。というのも、身体の末端というものは、気が継続的かつ豊富に送られてこない、健全にそれぞれの機能を果たすことができないからだ。<sup>(6)</sup>

つまりプレニーによれば、気が滞りなく、継続的かつ豊富に身体の末端まで送り届けられること

が、覚醒の維持にとって重要であるということになる。そこで、プレニーは茶の働きを思い出す。なぜ、茶は睡眠を妨げ、覚醒状態を維持するのか。

なぜなら、茶は苦味ゆえに固着液 *fixatif* かつ収斂剤 *astringent* として作用し、自然に反する発酵 *les levains contre nature*<sup>(7)</sup> を和らげたり、胃の入り口を収縮させたりすることによって、氣を乱し神経を詰まらせるあらゆる種類の粗悪な悪氣の上昇を妨げると思われる。そしてさらに、茶には非常に揮発性がつよくスピリット性の高い成分が多く含まれているので、労働や覚醒状態によって消散した魂氣をすばやく回復し、その魂氣の新たな流れを神経の中に生じさせることができる。そして感覚能力をもつ魂 *l'ame sensitive* の諸機能を再び働かせる力を全身によみがえらせることができるのである。<sup>(8)</sup>

以上のような茶の作用の仕組みをプレニーは考えていて、次のように結論づけている。

茶は発酵の原因 *les levains* を壊して自然に反する発酵 *les fermentations contre nature* を中断させ、消化を正常にし、余分な湿氣を吸収し、消化不良が起こるのを予防するので、頭、胃、体内の全ての病氣を防ぐことができる。すなわち頭痛、風邪や肺炎などの粘膜炎症、催眠性の病氣や、さらに放蕩や淫乱の結果生じるあらゆる身体の不調などを予防できる。だからこそ、中国や日本では、痛風や結砂に苦しむ人や卒中、てんかん、中風などに襲われる人がめったにいないのだ。<sup>(9)</sup>

また茶のもう一つの側面、香りの成分の働きについては次のように考えている。

揮発芳香性成分が豊富で香りのよい薬草は元氣付け作用や利尿作用があることを私たちは経験から知っている。茶もやはり揮発芳香性成分をもっているので、血の塊を浄化し、血液の動きを正常なものにし、血液のフィルターを掃除する働きがある。そのことから、茶には心臓の動悸、肺の乱れ、肺血管の損耗、間歇熱、腎疝痛などに効き目があることがわかる。<sup>(10)</sup>

このように茶の特質に由来するさまざまな効果について述べたあと、プレニーは最後に茶の飲み方について、目的別に注意事項を書いて第5章を終わっている。以下にその概略をまとめる。

まず、茶を嗜好品や食事の一部として楽しむ場合、あるいは健康保持や病氣予防のために飲む場合は、睡眠前を除いて、好きなときに好きなだけ気ままに飲んでも構わない。

しかし体調不良を治すために飲むなら、以下のような注意を守って欲しい。頭痛や何らかの炎症を軽減させたいときは必ず、砂糖の代りにバニラシロップを一匙茶に入れること。腹部の炎症や不調ならびに消化不良に起因するあらゆる病氣には、竜涎香かザクロのエッセンスを



1、2滴、茶に加えるとよい。痛風や腎疝痛の場合には、コーヒーのシロップがよい。最後に間歇性発熱には、次章で作り方を説明する解熱シロップが効果的である。(11)

このように第5章には、覚醒と睡眠についての考え方、なぜ茶が覚醒状態の維持に役立つのか、茶の苦味と揮発芳香性成分の作用の仕組みなどについて、興味ある記述が数多く含まれている。

なお、第6章でブレニーは自分の開発した解熱シロップについて、ほぼ次のように語っている。「このシロップは、茶、コーヒー、ココアから抽出した塩のエッセンス les sels essentiels で、容易にすばやく確実な効果の得られる間歇熱の治療薬となる。1682年頃この塩の抽出に成功し、その成果を雑誌に発表しようとしたら、敵対者の嫉みのせいで雑誌を発禁処分された。しかしそのような妨害に屈することなく、王の許可も得て、この素晴らしい解熱剤を人々に広めることにした。」

ブレニーは解熱シロップの効果にかなり自信を持っていたようだが、その製法は後日発表するのでもまだ秘密にしておくとしている。そのためどんなシロップだったのか、今日推定することはむづかしい。茶、コーヒー、ココアから抽出したエッセンスを原料にしていることは確かなので、何らかの有効成分は含まれていたと思われる。ただしブレニーが主張しているほど多くの病気に効く万能薬だったかどうかは保証できない。もっとも、あとで触れるように、瀉血、吐剤、下剤などにも頼っていた当時の宮廷医療の実態を考えると、ブレニーの薬の方が効果的だったのではないかと思われる症例も少なくない。

さらに第6章では飲食物と身体の関係、熱のある人の食事の摂り方などに関して細かな注意が書かれている。例えばブレニーは、生の野菜や果物は身体を冷やしてよくないという古くからの考え方を強調しているが、その一方で、人によって消化の速さが違い、それは消化酵素 le levain digestif のはたらきの違いによるといった新しい見解も示している。



図3 コーヒーセットの盆 (Blégny,168-169)

### 3) ブレニーの茶論の位置：同時代の医療と茶の医学史の中で

茶、コーヒー、ココアのどれにも堪えられません。どうしてああいうものが飲めるのか不思議です。茶は乾草や汚物の臭いがしますし、コーヒーはすすか腐ったイチジクのように、またココアは甘すぎます。ですからどれもだめで、特にココアを飲むと胃が痛くなります。わたしが欲しいものはおいしい冷たい飲み物やビールスープです。これらは胃を痛くしたりしません。

(1712年12月8日)<sup>(12)</sup>

ドイツのプファルツ出身で、ルイ14世の弟オルレアン公フィリップ1世の再婚相手となったリーゼロッテ(エリーザベト・シャルロッテ Liselotte von der Pfalz, 1652-1722)は異母妹ルーゼに宛てた手紙の中でこのように書いている。リーゼロッテは1671年に結婚してから1722年に亡くなるまで、故郷の地を踏むことはできなかった。正しいドイツ語を忘れないため、また異国の宮廷生活の窮屈さや疲労をまぎらわすために、6万通ともいわれる膨大な数の手紙をヨーロッパ中に散在する親戚の王族たちや知人に書き残した。

この手紙の文面からは、リーゼロッテが故郷の子ども時代をなつかしみ、晩年になっても幼い頃慣れ親しんだ「ビールスープ」の味に執着を感じていることがよくわかる。リーゼロッテは、三つの新しい飲み物をどうしても好きになれなかったらしい。宮廷では、午後のお茶の時間の習慣が定着し、茶かコーヒーを飲むようになっていた。また、甘いココアは女性たちに人気で、ルイ14世の王妃マリア・テレサは、リーゼロッテによれば、「ココアの飲み過ぎで」歯がなかった。

リーゼロッテとブレニーは同時代人で、没年は同じ1722年。ブレニーが宮廷の侍医だった時期はリーゼロッテが王弟妃となってフランス宮廷で過ごした時期と重なっている。ブレニーの茶論が書かれたころ、実際に茶はどのように飲まれていたのか、薬や治療法はどうだったかを知るうえで、リーゼロッテの手紙は貴重な資料といえる。

ブレニーの茶論が書かれた当時、宮廷では午後のお茶の時間の習慣が定着しており、茶かコーヒーが出されたことも、リーゼロッテの手紙からわかる。リーゼロッテは、この三つの新しい飲み物はどれもあまり好きになれなかったようだが、ルイ14世は、1686年9月にフランスを訪れたシャムのアユタヤ朝ナライ王の返礼使節から贈られた金のティーポットが気に入って、それで茶を飲んでいたといわれている。なおこのシャムの使節団のことはブレニーの茶論にも言及されており、この使節団から茶に関する知識も含めてアジアの情報を得ようとしていたことがわかる。

リーゼロッテの手紙には興味深い記述が多いが、ここでは、この当時の侍医団の主な治療方法は、瀉血、吐剤、下剤、浣腸、入浴などだったことに注目しておきたい。

ルイ14世は、1711年4月に王太子ルイ(49歳)を天然痘で失い、その息子でルイ14世にとっては孫にあたるブルゴーニュ公が王太子となった。ところが翌1712年には麻疹が流行し、2月12日にブルゴーニュ公妃(王太子妃)が26歳で、数日後の2月18日にブルゴーニュ公(王太子)が29

歳で相次いで命を落としている。ブルゴーニュ公妃はそのユーモアで王を楽しませ、ブルゴーニュ公は慈愛深い人柄で未来のフランスを託すべき人と周囲の期待を集めていた。ルイ14世の嘆きは深かったと言うべきだろう。ルイ14世自身は1715年9月1日、脚の壊疽のため76歳で世を去った。

王弟妃のリーゼロッテは、年若いブルゴーニュ公妃やブルゴーニュ公が麻疹で亡くなったのは、入浴、瀉血などの処置をとった侍医団によって殺されたようなものと述べている。2人の子で当時2歳だったアンジュー公も麻疹に罹ったが、侍女達が部屋に鍵をかけて侍医団の侵入を防ぎ、部屋を温かくして飲み物などを飲ませて守ったので、一命を取り止めたのだという。

王太子妃のお命を奪ったのは医師団だと断定します。病氣になられた王太子妃は発熱剤を投与され、その結果汗をかきはじめ、火のように真っ赤な発疹が出はじめました。ところが医師団は熱が出てしまうまで待てず、王太子妃をお湯につからせ、瀉血を4回施しました。その後ふたたび発疹が出て、もうなすすべがありませんでした。(1712年2月14日)<sup>(13)</sup>

この頃すでにブレニーは宮廷の侍医団の一員ではなくなっていたが、侍医団の内部でも治療方針などで意見の対立があることは多かった。ルイ14世の脚の壊疽の治療のときも、侍医長ファゴンと外科医長マレシャルの意見が食い違い、適切な処置ができなかったとされている。

ブレニーが瀉血や当時の治療法に対してどのような考え方をしていたか、茶論の中に直接的な言及はない。ただ、茶の特性について重要な点を押さえ、なぜ茶が覚醒作用を持つのか、睡眠や覚醒のしくみから根本的に説明しようとしている姿勢などをみると、瀉血や下剤一辺倒の医者だとは思えない。

瀉血や下痢に代わるもの、とくに緩下剤としての茶の働きについては、すでにオランダの医者ボンテクー(Cornelius Bontekoe, 1648-1685)も気づいていて、運動不足で便秘がちな上流階級の女性たちに茶を推奨していた。ブレニーも茶やコーヒー、キニーネなど自然界の植物や鉱物に病気を治癒する力をもつ物質が含まれているのではないかと考える立場にたっていた。これは古くからの民間医療や薬草医療の伝統を受け継ぐものだが、化学実験室で有効成分を抽出して混合し、解熱シロップなどの「新薬」や化粧品なども作ろうとしていた点では、新しい時代の医学者だったと言えるだろう。

ヨーロッパの医者による茶論の中で、オランダのボンテクー、ドイツのケンペル(Engelbert Kaempfer, 1651-1716)、イギリスのショート(Thomas Short, 1690?-1772)、レットサム(John Coakley Lettsom, 1744-1815)などと並んで、フランスのブレニーの茶論は重要な位置を占めている。結論的に言うと、茶の医学史の中ではブレニーの茶論はボンテクーに続いて茶の有効性を説いた初期の理論的かつ実用的な茶論と位置づけることができる。

茶をヨーロッパに普及させた人として知られるボンテクーの茶論では、茶による病気の予防や日常生活の改善ということが期待されていた。<sup>(14)</sup> 病気の治療よりは、予防に重点がおかれており、健康を守るための飲み物や水と血液の重要性が指摘されていた。まだヨーロッパではそれほど馴染み

がなかった茶という飲み物にボンテューが注目したのも、他の飲み物よりも安心して多量に飲むことができ、身体への良い作用をもつ「優れた薬草」であると考えたからだった。

ブレニーの茶論では、茶を飲む習慣ができたはじめたフランスの上層社会の人々に茶の正しい用法や効果を知らせることが中心課題になっていた。したがって、茶葉や茶樹についての説明や中国や日本などでの茶の飲み方、おいしい茶を飲むための茶道具や淹れ方の工夫などについてもかなりの紙幅を割いている。しかしもちろん本稿で見てきたとおり、茶の人体への作用に関する医学的考察が重要な位置を占めている。なかでも、茶の最も顕著な作用として覚醒作用の説明を試みていること、苦味、渋味、芳香性という茶の重要な特性にいち早く注目して医学の立場から分析していることは、ブレニーの大きな功績と言ってよい。

ブレニーの先見性は、約100年ののち「18世紀欧州最高の茶論」と評される『茶の博物誌』(1772, 1799)を書いたイギリスの医者レットサムによっても認められている。レットサムは、『茶の博物誌』の中で何度かブレニーの名前をあげ、ブレニーの茶論を引用している。例えば、茶の収斂性に関する実験について報告したあと、レットサムは次のように述べている。

しかし、すでに1680年に出版した著書『茶の上手な使い方』の中でニコラ・ド・ブレニーは茶の収斂性を指摘しており、茶の優れた効能はこの収斂性に由来するとしている。先見の明があったというべきだろう。<sup>(15)</sup>

## おわりに

以上のように、本稿ではニコラ・ド・ブレニーの生涯と仕事を振り返り、茶論を再読した。その結果、17世紀ヨーロッパの茶論の中で、医者立場から書かれた先駆的な著作であることがわかった。ブレニーの用語をさらに深く理解するためには、同時代の自然学、錬金術、医薬植物学などの文脈をたどり、学ぶ必要があると思われる。北ドイツ、デンマークなどで活躍したパウリヤオランダのボンテューの茶論と比較すると、1678年頃から1693年という時期にフランス宮廷の侍医であったブレニーの茶論は、その立場から得られた見聞・観察の鋭さと独自の進取の気性を生かした創意工夫・実践の跡が顕著に見られる。当時のヨーロッパで権勢を誇ったルイ14世の宮廷には、茶、コーヒー、ココアという新しいファッションブルな異国の飲み物が集まっていた。同時期に宮廷の生活を体験した王弟妃リーゼロッテの日記とも合わせて詳細に検討することにより、フランス宮廷の日常生活の中で、これらの飲み物がどのように受容されていたのかがもう少し具体的に浮き上がってくるのではないかと。フランスは、当時のヨーロッパのどの宮廷よりも、これらの貴重な飲み物を入手する機会と豊かさに恵まれていた。ブレニーは、実際に身近に茶を飲み、治療に用いることができる立場にあったからこそ、その用い方をこれほど詳細に具体的に書くことができた。あまり茶に親しむ機会がなく、文献に頼らざるを得なかった一代前前の北欧の医学・植物学者パウリとの違いは大きい。初期のヨーロッパ茶文化史研究におけるフランスの茶書の重要性を改めて確認する

ことができた。内容のさらに詳細な解説ならびに他の茶書との比較研究を今後の課題としたい。

本論と直接の関係はないが、最近の茶研究の動向として、例えば近年、大東文化大学大学院アジア地域研究科では、台湾、中国、ベトナムなどからの留学生による修士論文が提出されている。台湾の茶藝、無我茶会、中国の若者の茶離れと茶文化教育、抹茶文化復興、禅茶文化の歴史、ベトナム文化の中核をなす場としての路上茶屋などのテーマが見られる。かつて中村元が『学問の開拓』の中で比較思想研究と世界平和の理想について述べたように、茶をとおしての文化交流や比較文化研究の地道な蓄積の成果が、やがて将来の世界平和につながるかもしれない。疫病蔓延や核軍拡競争など「死の商人」たちの暗躍する今日の世界において、協調と共生、調和に満ちた人間の文化の復興はいかにして可能になるのか。茶は、柔和なる者たちの「対話」をもたらす飲み物であり、「生きる藝術」Art of Lifeでもあるという。今日、茶の女神の役割はさらに大きくなっているように感じられる。<sup>(16)</sup>

## 注

- 
- (1) 原題は、*Le bon usage du thé, du café et du chocolat pour la préservation et pour la guérison des maladies*, Lyon, 1687. 以下の引用に際しては、Blégny と略記し、頁を数字であらわす。テキストにはジュネーブ大学図書館所蔵本を使用した。
- (2) Blégny, 25.
- (3) Blégny, 24-30.
- (4) 「魂氣」については、クレインス、フレデリック「宇田川玄真の神経観<sup>(1)</sup>」『科学医学資料研究』31- (1) 2003, 209 (3) 頁参照。
- (5) Blégny, 45.
- (6) Blégny, 48.
- (7) この les levains はパン種や心配の種などを表わすことばで、ここでは不消化やガスの発生などをもたらす、体内の発酵現象の原因となるものを指していると考えられる。
- (8) Blégny, 48-49.
- (9) Blégny, 49-50.
- (10) Blégny, 50-51.
- (11) Blégny, 52-53.
- (12) 宮本絢子『ヴェルサイユの異端公妃—リーゼロッテ・フォン・デア・プファルツの生涯』鳥影社、1999年、87頁。
- (13) 宮本、前掲書、272-274頁。
- (14) Cornelis Bontekoe, *Tractaat van het excellenste kruid thee*, Hague, 1678.
- (15) J. C. レットサム著、滝口明子訳『茶の博物誌』講談社学術文庫、2002年、103頁。J. C. Lettsom,



*The Natural History of the Tea-tree, with Observations on the Medical Qualities of Tea, and on the Effects of Tea-drinking*, London, 1772, 2nd, 1799. なお文中でレットサムが1680年としているのは誤りか、概数で書いたものかもしれない。ブレニーの茶論の1680年版は未見で、レットサムはこのすぐあとの箇所です1688年版を使用したと書いている。また茶の芳香性についても、ブレニーの説を引用して、熱い茶の香りは鎮静剤のような効果があり、頭痛の解消にもなる、と症例をあげながら述べている。J. C. レットサム、前掲書108-9頁。ヨーロッパの茶論の歴史については、拙著『英国紅茶論争』講談社選書メチエ、1996年を参照。

- <sup>(16)</sup> 前掲二著『英国紅茶論争』『茶の博物誌』を含め、茶に関する筆者の論考として例えば以下のようなものがある。

・『茶の文化史：英国初期文献集成』全5巻＋別冊日本語解説2004 ユーリカプレス

この資料集には、前述のパウリ、ボンテクー、ケンペル、ショート、レットサムらの茶論も収録されている。別冊日本語解説には、各茶論に関する解説と茶史研究の大きな流れがまとめられている。

・「欧米茶書の中の東洋—ボンテクー『茶論』研究」『東洋研究』第185号 p.39-73 (2012) 「欧米茶書の中の東洋—シモン・パウリ『煙草・茶論』研究」『東洋研究』第180号 p.21-59 (2011) 「欧米茶書の中の東洋—オーヴィントン『茶論』研究—」『大東文化大学紀要』第55号〈人文科学〉 p.161-178 (2017)

この三論文は、標題のとおり、ボンテクー、シモン・パウリ、オーヴィントンの茶書を扱っている。筆者は、このオーヴィントン論文を執筆中は未見であったが、その後、イギリスの研究グループによる共著でも、オーヴィントンが取り上げられている。

Markman Ellis, Richard Coulton and Matthew Mauger, *Empire of Tea: The Asian Leaf that Conquered the World* (Reaktion Books, London, 2015) 越 朋彦 訳 『紅茶の帝国—世界を征服したアジアの葉』(研究社 2019) 参照。18世紀文学、コーヒーハウスの研究などに関するエリスの仕事については、例えば、Markman Ellis, *The Coffee House: A Cultural History* (Weidenfeld & Nicolson, London, 2004) を参照。このグループの出版した資料集も貴重なもので参考になる。Markman Ellis (General Editor), *Tea and the Tea-Table in Eighteenth-Century England*, 4 vols., (London: 2010) ただし、日本ではすでに2004年に、前述の茶文化資料集(ユーリカプレス)が出版されている。

・「トルコ装束の画家」リオータル研究序説—文化史的考察『東洋研究』第215号 p.51-75 (2020) は、忘れられた18世紀スイス出身の画家を取り上げている。

その他、筆者による著述・論考として、以下のようなものがある。一部重複するものもあるが書誌情報をまとめておく。

『茶の事典』朝倉書店：編集・執筆：担当項目 2.2「アジアからヨーロッパ・アメリカへ」p.98-109、2.3「茶の世界的流通」p.109-125、3.4「欧米の茶文化」p.198-213 (2017)；『お茶を愉しむ

—絵画でたどるヨーロッパ茶文化』大東文化大学東洋研究所 全215頁+文献表等29頁(2015)；「欧米茶書の比較文化史的研究—イギリス茶文化の形成と紅茶論争」博士論文(2014)；『英国紅茶論争』講談社 全252頁(1996)；『茶の博物誌』講談社(翻訳と解説) 訳者序文 p.6-16 解説 p.161-209 全221頁(2002)；「別冊日本語解説」『茶の文化史：英国初期文献集成』ユーリカプレス p.3-43(2004)；「ヨーロッパにおける東洋の茶」『東洋の茶』高橋忠彦編 淡交社 p.263-294 全436頁(2000)；「『アジアの葉』を求めて 欧米より見たアジアの喫茶文化」勉強出版 アジア遊学88号『アジアの茶文化研究』p.34-46(2006)；「ティー・テーブルの快樂—茶の英文学史事始」『〈食〉で読むイギリス小説』安達まみ、中川僚子編 ミネルヴァ書房 p.2-26(2004)；「ボンテクー『茶論』の文化史的意義について」『女性研究者による茶文化研究論文集』（茶の湯文化学会、茶学の会、第5回世界お茶まつり実行委員会）p.115-129(2013)；「読書・女性・魂—アゼニアン・マーキュリー—の答え方」『コミュニケーション科学』（東京経済大学）第17号 p.79-99(2002)；「ニコラ・ド・ブレニーの茶論—17世紀後半のフランスにおける茶の医学的意味について」『科学医学資料研究』第31巻3号 p.37-45(2003)；「ヨーロッパの茶の文化—紅茶文化の源流をたずねて」『茶の文化』（茶文化学術情報誌）第2号 p.27-58(2002)；「メアリ・アステルの夢—17世紀の女子大学構想とその波紋」『比較文化研究』（日本比較文化学会）第46号 p.24-34(2000)；「*The Athenian Mercury* にみられる17世紀末英国の生活と思想」『熊本大学文学部論叢』第59号 p.83-108(1998)；「『エマ』における茶」『熊本大学英語英文学』第39号 p.1-18(1996)；「18世紀の女性と会話について—『タトラ』から『スペクテーター』へ」『熊本大学教養部紀要』第30号 p.19-39(1995)；「18世紀の女性と読書について—『スペクテーター』紙の読書論」『熊本大学教養部紀要』第28号 p.69-84(1993)；「『ジェイン・エア』における茶」『熊本商大論集』第37巻3号 p.203-219(1991)；"Wuthering Heights and Tea", *Kumanoto Studies in English Language and Literature*, 29 & 30, p.102-113(1987)；「Lettsom の茶論の文化史的意義」『熊本大学教育学部紀要』第35号 p.195-204(1986)；"Tea and Conversation in *The Spectator*", *Kurokami Review*, 8, p.67-94(1985)；「茶文化に見るアジアとヨーロッパの交流」『アジアセンターニュース』（国際交流基金アジアセンター）26号、14-15頁(2004)；「ヨーロッパの茶文化」『緑茶通信』第20号、37-40頁(2007)；「喫茶学の未来 多様性と対話の時代」NPO 現代喫茶人の会『喫茶人』第25号(2006)；「お茶は東から西へ」『茶道の研究』第507号、12-15頁、茶道之研究社(1998)